〔書　評〕

早田輝洋著

『音調のタイポロジー』

松森晶子

1. はじめに

本書は，1969年から今日に至るまでのほぼ30年間の，著者の音調・アクセントに関する主たる論文19点を収録した論集である。これらの論文において，分析・考察の対象に挙げられている言語は実に多岐にわたり，著者の広範な知識にはあらためて感服するが，本書を通読すると，それら諸言語の考察のすべてを通じて，ある一貫した研究態度が貫かれていることが理解できる。それは，世界の声調言語やアクセント言語を包括的に記述・分類する類型論的視点から諸言語の個々の現象を位置づけ，その意味を問う，という姿勢である。とりわけ，著者がこれまで特に力点をおいて分析してきた日本語諸方言および朝鮮語諸方言のアクセント体系，およびそれらの内部に観察される諸現象を，このような類型論的視点からあらためて分析し，あらたな問題提起を行っているのが本書の最大の特色と言えよう。

本書で取り扱われている，アクセントから見た日本語における音節の役割，語構成や文構造とアクセントの関連，などの研究テーマについては，類型論的視点に基づく普遍性追究を目指した研究が，最近になってようやく緒に就き，着々と成果を挙げつつある。したがって本書で貫かれている類型論的視点からの日本語アクセントの考察は，現在でこそ決して珍しいものではないと言えよう。しかしながら，すでに1960年代後半から，一貫してこのようなテーマのもとにアクセント研究に従事してきた著者の研究姿勢は，今日，あるいは今後のアクセント研究の主要な課題をまさに先取りした，先駆的なものと言っても決して過言ではないだろう。

このようなテーマに貫かれた本書は，従来，我々が日本語諸方言の記述において，特にその理論的意味を追究することがなかった諸現象の持つ言語学的意味を，巨視的視点から問い直す機会を与えてくれる。また，「アクセント」，「音調」，「核」，またそれを担う単位としての「音節」，「モーラ」など，我々がこれまで何気なく受け入れ，使用してきた概念を，あらためて一般言語学的視点から見直すことも可能にしてくれる。

しかしながら，本書は（もちろん論文集という性格上やむをえないことではあるが），特定の層の読者を念頭において執筆されたものではないため，論文のレベルに統一性がなく，特に初学者，また抽象度の高い音韻論の議論の仕方に日頃慣れ親しんでいない者にとっ

ては，全般的に言って決して読み易くはない。しかし中には(おそらく意図的にであろう)論文というより，比較的平易に書かれた解説のような文章も，本書には収録されている。第1章「音調とは何か」，第2章1節「東アジアにおける九州方言」，第3章3節「アクセント分布に見る日本語の古層」，第4章1節「『アクセント』早わかり」などがそれである。したがって，著者の論に馴染みの薄い読者は，まずそこから読み始めることを勧めたい。特に第1章「音調とは何か」の章は，この論集のために書き下ろしたもので，本書に収められた諸論文において展開されている各種の議論の要点が，分かりやすく，要領よくまとめられているので，大変有難い。

本書の議論は，第1章の論文を除けば，テーマ別に大きく次の3つの章から構成され，第2章に7篇，第3章に6篇，第4章に5篇の論文が収録されている。

第2章　音調の類型と比較
第3章　アクセントの基底表示と担い手
第4章　アクセントとイントネーション

このうち第2章で扱われているテーマが，本書の最大の論点であり，最も多くの頁数をさいて議論されている。また，類型論的視点に立脚した著者の本領がここに最も発揮されていると思われるので，本稿は，以下，このテーマに特に焦点をあてて論評を加えたい。

2. 音調とアクセント

これまでの日本語諸方言の分析においては，音調(声調)言語としてもアクセント言語としても記述できるという例に遭遇することがあった。その典型が，鹿児島方言である。たとえば，上野善道氏はこの方言をN型アクセントのひとつと考え，一貫して「アクセント言語」として記述している。著者はこれに対し，「語声調」という概念を提示し，鹿児島を始めとする九州西南部地域のアクセント体系を，一括して「音調言語」として記述するという提案を行っている。

このように，音調言語としてもアクセント言語としても記述できる言語体系を，どちらとして記述することがより妥当かという問題は，本来，日本語のアクセント研究にとっては避けて通れない大きな課題であるが，この点に焦点をあてた議論は意外なほど少ない。したがってどちらかを決める決定的な指標は，管見の限り未だ存在していない。これについては，一言語（たとえば鹿児島方言）の体系の内部だけを観て，どちらのほうが，ルールの数が少なくて済むとか，基底表示がエレガントになるとかいうような議論も可能ではあろうが，それだけではさして説得力のあるものとは思えない。この問題には，やはり著者の目指している方向からの議論，すなわち類型論的な視点に立って，「何が音調言語的で，何がアクセント言語的か」という観点から，巨視的に判断することが不可欠であると思われる。

著者によれば，この2つのタイプのどちらかは，当該言語のアクセントの表出がどのような物理的手段によるかということではなく，その言語の音韻的情報の質の違いによって決定される。すなわち音韻的に，「位置」が有意味であれば「アクセント言語」，「種類」が有意味であれば「音調言語」となるのである。アクセントは，たとえば「第1音節にある，第2音節にある，後から2番目の音節にある」等々，それが当該単位の「どこに有るか」ということが問題になるものであるから，一般に，単語の長さが増すごとにアクセントの型も増す。一方「音調」とは，アクセントとは異なり「その言語・方言により一定数」のトーンのうち，個々の音節（形態素，語）が「どれ」を持っているか，ということが問題にされる。このような音調言語では，原則的に「単語の長さに関係なくそのすべての声調数の区別がなされる」わけだから，単語の長さが増していっても，その言語で指定された音調数以上に，音調型の数は増えては行かない。

このような著者の基準に従えば，鹿児島方言は，典型的な音調言語ということになるのである（しかし中国語のような，音節ごとに調素(toneme) が指定されている言語ではなく，単語ごとに指定されるものである。これが鹿児島方言が，語声調といわれる理由である)。一方，東京方言はアクセント言語であり，京都方言は音調とアクセントの両方が共存した体系を持つ，ということになる。

さて，これまでのアフリカ諸言語の研究成果などを参照すると，いわゆる lexical tone language と言われる典型的な音調言語が，その対立型の数を徐々に減らしていく結果として，そのトーンの組み合わせに制限（たとえば現代東京方言のように，一つの音調句の内部に高い音調の山が1カ所しか出現しない，というような制限）を持つ，いわゆる restricted tone language とよばれるものに変化していくという傾向が指摘されてきた（Hyman and Schuh(1974)）。このような制限を持つ体系は，どこでHからLへの下がり目があるか（またはどこでLからHへの上がり目があるか）という「位置」だけが与えられれば，全体のピッチパターンが予測できるわけであるから，音調の「種類」ではなく「位置」が辞書に記述されることになる。つまり，すでにアクセント言語に一歩近づいたわけである。そのような変化の帰結として，典型的な音調言語が，徐々にアクセント言語的なものへと移り変わっていく，というような変化の一般傾向が存在する，ということが従来言われてきた(Clement and Goldsmith (1984))。

これに対して，本書によって著者の提示したものは，それとは逆の変化の方向性である。すなわち，上述のような過程を経て成立したピッチアクセント言語において，さらにその対立型の数が整理され，「位置」が対立を担わなくなり，音節数の増加に応じて型の数が増えていかないような体系が成立すれば，これは一種の音調言語に変化したのだ，と主張しているのである。これは著者が，たとえば朝鮮語諸方言のアクセントについて，ピッチアクセント体系から語声調が生まれたという系譜関係を想定していることからも観てとれよう。つまり，従来の「音調→アクセント」という方向に対し「アクセント→

音調」という変化の方向性を提示したわけで，これはユニークな視点と言えよう。

ここで私見を述べれば，私は著者の考えるように，京都のいわゆる低起式，高起式といわれるものを「音調」の違いと捉えることには異論はない。しかし，九州西南部の2型アクセントの型を，京都などの音調と同等に扱うことには，やはり抵抗がある。

たとえば，鹿児島と都城との関連はどう捉えられるのであろうか。尾高1型の都城は，鹿児島のような方言が，さらに型の区別を失って1型化したものと考えられるが，これは一種のアクセント言語といえるのではないだろうか。すなわち，語句の末尾だけが高くなるというのは，すなわちアクセントの機能である「語句のまとまりや区切りを表示する」という「境界表示機能」を，最大限に拡張した言語体系と言えよう。仮に，鹿児島との関連を配慮して，都城にももし音調を与えるとすれば，「すべての語彙がLHという音調を持つ」ということにでもなるかもしれない。しかし，音調の主たる役割は単語の「弁別機能」であることを考慮すると，ただ1種類の音調しかない音調言語などというのは意味を成さない。

仮に，鹿児島が音調言語で，都城がアクセント言語としよう。そうすると日本語のアクセント史の全体的傾向は，現代京阪タイプのようにアクセントと音調の両者を兼ね備えたような体系から，アクセント言語（東京タイプ）〉音調言語（鹿児島タイプ）〉アクセント言語（都城タイプ）のように，めまぐるしい変化を遂げていくものと考えなければならなくなってしまう。

私は，現代東京方言の動詞，形容詞のアクセントのいわゆる起伏型，平板型を［+accent］［−accent］の違いと捉えているが，九州西南部の2型アクセントもそれと似たものであると考えている。そのうち，島原，諫早，鹿島などのアクセント（これらをここでは仮に「島原タイプ」と名付けよう）における［+accent］の型は，「魚」サカナ，サカナガのように語句の頭から2音節（拍）目にアクセントが出現するが，これはやはり「位置」が根強いアクセント体系と言えよう。一方，鹿児島では，これらに対応する語彙は，「魚」サカナ，サカナガのように，語句の末尾から二つ目の音節にアクセントが置かれるため，一見するとあたかも「島原タイプ」ではアクセントの位置が固定しているのに，鹿児島では移動していくかのように見える。しかし，これらはその出現の仕方が異なるだけで，機能から見ると同じものではないか。英語などのストレスアクセント言語の記述の枠組みでは，そのパラメータの一つとして，アクセントの付与が「韻律境界（語句）の左端から適用するか，右端から適用するか」という選択肢が仮定されている。鹿児島と島原はこの選択肢の値が違うだけであり，「鹿児島は右端から，島原は左端から」アクセント付与が適用する，という違いに過ぎない，と考えることが可能であろう（つまり，上野(1984 a）の用語を借りれば，島原は文節の「頭部固定型」で鹿児島は「末部固定型」ということになる）。このように視点を変えると，一見長さに応じてその高い音調の山の位置がずれていくかのように見える鹿児島方言も，実は「位置」が有意味なアクセント言語の

一つであるとすることができるのではないか。

さらに著者は，アクセント・音調言語の類型的特性として，従来，日本の方言研究でいわゆる「式保存」と呼ばれてきたものに関連した，次のような複合語規則を挙げている。すなわちAとBから成る複合語A＋Bにおいて，「声調のある言語であれば，Aの声調がA＋B全体の声調になり，アクセントのある言語であればBのアクセントがA＋B全体のアクセントになる」(p. 63) という規則である。

しかし，日本語諸方言を観る限り，この規則には例外も多い。たとえば著者が典型的な語声調体系の一例として挙げている隠岐島諸方言では，「Aの声調がA＋B全体の声調になる」といういわゆる「式保存」が成り立っていないことは，上野 (1984 b) 以来よく知られている。私自身も2年ほど前に隠岐島に行ってこれを確認したが，その帰途に山陰の米子市に立ち寄って調査をしたところ，アクセントの有無による一種の式保存が成り立っていた。米子アクセントは「位置」が有意味で，しかも単語の長さに応じて型の数が増えていく，典型的なアクセント言語であるにもかかわらず，である。また私の調査では，奄美の沖永良部島の諸方言も「位置」が有意味なアクセント体系を持っており，また決してN型ではないのだが，きれいな式保存が成り立っている。一方，同じ奄美の喜界島諸方言は，そのほとんどが2型アクセント体系を持ち，しかも語句の長さが増すにつれその高い音調の山がずれていく(つまり位置が有意味でない)という，まさに著者の言う「語声調」の典型のような体系であるが，式保存は成り立っていない。

そもそも「長さに応じてアクセント型の数が増していかない」N型の体系であるという事実と，「前部要素 (A) が複合語全体 (A＋B) の式を決定する」という事には，必然的なつながりが存在するのだろうか？　もし存在するとすれば，その理由はなぜか？著者が挙げているように，アジアの多くのプロソディー言語にこのことが類型的にいえるとすれば，そこには何らかの本質的な原因のようなものがあるはずと私には思えるのだが，本書を通読してもそれは明らかにならない。一方，上野(1984 a，b)は式保存をN型アクセントの一般的特性であるとは考えていない（すなわちその間に必然的つながりがある，とは考えていないようだ)。その代わり上野 (1984 a，b) は，この式保存は諸方言の類の統合の仕方と関係があり，もともと存在した高起・低起式の区別が諸方言に継承されたものと考えているようであるが，私個人は，今のところこれも一つの仮説であると思っている。したがって，これらの問題，すなわちそのつながり（がもし存在するとすれば，そ)の理由，あるいは式保存発生の原因については，依然として未解決のまま残されている，といわざるをえない。豊富なN型アクセント（著者の「語声調」）体系を内包する琉球諸方言の，詳細な記述の進展が，その問題解決のための重要な鍵となるだろう。

3．モーラと音節

第3章では，著者は，アクセントを「担う単位」と「数える単位」とに区分し，各々

についてモーラと音節の役割を論じている。まずアクセントを担う単位としては，従来の（共通語も含めた）日本語諸方言アクセントの記述では，モーラ（拍）の役割のみが詳細な検討もなしに強調され，音節の果たす役割はさほど大きくないかのように考えられてきたが，著者はそのことに警鐘を鳴らし，ある言語においてモーラがアクセントを担っていると断定するためには，CV]C. CVC 対 CVC]. CVC のような対立，すなわち重音節内部の第1モーラと第2モーラで，アクセント型のはっきりとした音韻的対立があるということが確認されなければならず，その対立が見られない体系は，音節がアクセントを担っていると考えるべきことを主張している。また，このような基準を用いると，共通語だけでなく諸方言のなかにも，音節がその担い手になっていると考えられる体系が，予想以上に数多く存在することが示唆されている。

アクセントを数える単位については，共通日本語のアクセントは「モーラ」が数える単位であると従来から言われており，著者もそれを支持している。そうすると日本列島には，数える単位も担う単位もモーラであるような体系（例：伊吹島）から，シラビーム方言を典型とした，数えるのも担うのも音節が単位である体系（例：鹿児島）までが分布し，そしてその中間に，共通日本語のようなモーラで数えて音節がアクセントを担うような体系（最近の早田（1994）では，共通語を含めた日本語諸方言のアクセントの担い手は，音節からモーラに移行しつつあるとされているが）も存在しているということになる。

私の関心は，一体何を契機にして，このように数える単位，担う単位が入れ替わるのか，ということにある。また，これに関連した問題として，いわゆる「シラビーム方言」のような体系がどうして（どのようなプロセスを経て，という考察はたとえば木田（1998）にあるが，なぜそれが例えば北奥方言に生じ（あるいは残ら）なければならなかったのか，ということは未詳である）発生したのか，ということも知りたい。さらに，この問題ともかかわる事であるが，Odden（1999）によれば，音調言語では「モーラ」が数える単位となる体系が数多く観察されるのに対し，アクセント言語では一般に「音節」をその単位とする傾向がある，というような指摘があるが，日本語諸方言の間にもそのような類型的相関性は観察されないのであろうか。

以上のような諸々の課題を追究していくためにも，今後諸方言の記述を通じて，著者の提示してくれた基準を用い，このアクセントを数える単位と担う単位の，全国におけるより詳細な分布状況を把握していく必要があろう。

4. 語句と文のアクセント

第4章では，語句や文の内部に見られる複数の段階のピッチを決定する仕組を，その文法構造をもとにして導き出そうという試みを行っている。それまで全く未踏であったと言ってよい領域に一歩踏み込んだ意欲的な試みであるが，これらの論文が執筆された時代が1960年代後半から70年代ということもあって，周期的に適用する規則群によっ

てピッチの段階を導くなど，当時の生成音韻論の手法の影響を色濃く反映している。

これらの論文中，特に注目すべきは，たとえば「公務執行」の「妨害」なのになぜ［コーム］［シッコーボウガイ］なのか，また「反佐藤勢力」は［ハン］［サトーセーリョク］なのになぜ「反革命勢力」は［ハンカクメイセーリョク］となるのか，あるいはニューヨークヤンキースとボストンレッドソックスのアクセントパターンはなぜ違うか，などの問題提起を，すでに30年も前に行っているという事である。これらの問題は，たとえば窪薗(1995)の研究において取り上げられ，論じられ始めているが，まだまだ開拓の余地がありそうである。本書によって成された問題提起が，若い研究者に継承され，特にこの分野の研究が今後さらに進展してくことが期待される。

5. おわりに

最後になったが，本書を通じて私が最も興味をそそられたのが，朝鮮語アクセントに関する一連の論考である。1970年代に書かれたこれらの論文では，音韻分析のモデル的議論展開が見られ，朝鮮語のしろうとである私にとっても参考になった。ソウル方言や慶尚道諸方言などに観察される，特定の語彙に出現する語頭の長音節を，母音連続のような分節音的な現象としてではなく，韻律的な現象，すなわちアクセントの実現した形と捉え，それによってアクセント体系の均整や，アクセント移動によって引き起こされる母音の長短交替の有無の説明などの理論的な整合性を追究するなど，斬新であるが合理的でかつ緻密な議論が印象に残る。その議論の仕方は，日本語アクセントの研究者にとっても参考になるであろう。

一方，朝鮮語諸方言の系譜に関する議論については，15世紀の文献から導き出された中期朝鮮語のピッチアクセント体系から，すべての現代諸方言のアクセント・語声調体系が発展してきたという仮説を著者は提示しているが，たとえば中期語の昇り目アクセントが慶尚道諸方言の下り目アクセントに「スイッチ」したというのは，体系全体を考慮に入れた変化の自然さという観点から考えて，やはり納得し難い。現代日本語の方言調査において我々が使用している類別語彙のようなものを開発し，それを使ってこれら現代朝鮮語諸方言を組織的に調査すれば，すべての現代方言への変化をより自然に説明できる，15世紀より古い段階の祖体系に遡れる可能性もあるのでは，という印象を抱いた。

以上，本書の多岐にわたる内容の幅に比して，本稿はその一部を伝えるだけにすぎず，したがって，本書の真価を充分伝え得たとはとても言い難い。

概して，これまでの日本語のアクセント研究は，限られた地域の方言の現象の報告・記述とその分析に焦点を当てた，いわば「微視的視点」から成されたものが多かった。その点，著者の一連の研究は，このような微視的な視点に加えて，巨視的な考察が成され，両方の視点が相まって生まれるものであり，このようなタイプの研究の実例を具体

的に我々に示してくれた本書が，価値の高いものであることは言うまでもない。今後のアクセント研究に何が必要かを教えてくれる良書と言えよう。

著者自身も認めていることだが，これまでに著者の書いてきた諸論文は，かならずしも手に入りやすいところに発表されたものばかりではなかった。それらが，今回このように一冊の書物にまとめられたことによって，格段に参照しやすくなり，著者の考えが，以前より接近しやすいものになったことは間違いない。しかし，本書を通読していて，同じ一つの論点に関連し，諸言語間の現象を比較・検討するために，本書中の離れた箇所をあちこちページを繰って参照しなければならないことがあった。したがって，著者の考え方の全体像を手際良く把握するためには，本書はかならずしも最適であるとは言えない。著者のような問題意識を抱いて方言研究に取り組む研究者が，今後(とりわけ若い世代に)輩出されることを強く望む者の一人として，本書とは別に，著者の視点を分かりやすく概説した本が将来執筆されることを望んでやまない。このような希望を抱いているのは，私ばかりではないであろう。

参考文献

上野善道(1984 a)「N 型アクセントの一般的特性について」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題』第 2 巻　明治書院

上野善道(1984 b)「類の統合と式保存――隠岐の複合名詞アクセント――」『国語研究』47

早田輝洋(1994)「日本語の音節」『国語学』178 集

木田章義(1998)「音節とモーラ」『音声研究』第 2 巻第 1 号

窪薗晴夫(1995)『語形成と音韻構造』くろしお出版

Clements, G. N. and John Goldsmith (1984) "Autosegmental Studies in Bantu Tone : Introduction", Clements, G. N. and John Goldsmith (eds.) *Autosegmental Studies in Bantu Tone*. Dordrecht : Foris Publications.

Hyman, Larry M. and R. G. Schuh (1974). "Universal of Tone Rules : Evidence from West Africa", *Linguistic Inquiry* Vol. V No. 1.

Odden, David (1999) "Typological Issues in Tone and Stress in Bantu", *Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena : Tonogenesis, Typology, and Related Topics*. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa : Tokyo University of Foreign Studies.

〈付記〉

本稿を脱稿後，同書についての上野善道氏による書評が『言語研究』第 117 号に公表された。それを読み，あらたに加筆して論じたい点なども生じたが，紙幅の都合上，あえて改稿はしないこととした。あわせてそちらも参照されたい。

――日本女子大学文学部助教授――

(2000 年 3 月 22 日　受理)